

# 教 育 研 究 業 績 書

2019年6月24日

氏名 三木 麻子 印

教育上の能力に関する事項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例 小試験の活用（国語・文章のトレーニング）	2008年～現在 に至る	シラバスに沿ったカリキュラムを実践する合間に、テーマを切り替えて学生の集中力を持続させるために、四字熟語や常用漢字付表の漢字などのプリントを配布し、短時間に用法を学ぶようにした。さらに同様の時間を使って、小試験を行い、時間外にも漢字学習に取り組むようにさせている。主に文章力を磨く講義の中で漢字の習得にも留意している。
課題の工夫（国語・日本語を考える）	2008年～現在 に至る	学生が「新聞」を読み、社会問題に目を向ける機会を持つよう、講義内容以外に、課題として新聞の切り抜き要約を課している。添削して返却し、平常点への加点をすることで意欲を高めるようにしている。
教育効果を高めるための取り組み （図書館の積極的な利用）	2011年・2013年・2015年・2017年・2019年	子ども学ゼミAにおいて「絵本」がテーマであることもあり、図書館利用方法を図書館で具体的に教えている。学生は検索やレファレンス利用など高度な利用についてはほとんど関心がないところから工夫した。
教育効果を高めるための取り組み （プレ学習）	2011年～現在 に至る	入学前の生徒に対し、学科への興味を深めるために「国語」の課題として同期生に薦めたい絵本や児童書の推薦文を書かせている。寄せられた推薦文は添削して返却する。また推薦本リストを作成して入学者全員に配付している。図書館でリストの本がなければ購入し、推薦本コーナーを設けて展示することで、絵本・児童書への関心を持たせるようにしている。
2 作成した教科書、教材 講義用教材（文章のトレーニング）	2008年～現在 に至る	毎年、児童教育学科の学生の学力・必要に応じて、プリント教材を作成、改善を加えている。レポートや報告書などに使う論理的な文章を、いかに的確な用語を使って、わかりやすく書くかを目標に講義を進めている。具体的には、「文章とは」「事実と意見の区別」「構文力」「句読点と記号」などのテーマで、その理解と習得に役立つ教材を考案している。
講義用教材（日本語を考える）	2008年～現在 に至る	多様な日本語表現作品に触れさせるため、小説、詩、歌詞、随筆、コラムなどを選択し、教材としている。毎年、学生の理解力・表現力に応じて素材を選択している。
3 当該教員の教育上の能力に関する大学の評価 授業アンケート結果	2008年～現在 に至る	授業アンケートに対しての返答コメントは必ず行うようにし、教室などへの要望については変更などの対策を講じている。授業内容については、熱意を持って取り組んでいることを評価してくれていると考えている。
4 その他 1. 『教育実践研究紀要』4号（2011） スーパーバイザー	2012年3月	けるリレー講義と産学連携のトライアル報告」（第6類）について原稿を読み、掲載に向けての具体的なアドバイスを行いコメントした。

2. 『教育実践研究紀要』 5号 (2012) スーパーバイザー	2013年8月	朝野典子「幼児音楽特別研究における教育実践 [I] —歌唱ピアノ伴奏の実技発表を通して学生たちが得た気づき—」(第3類) 原稿を読み、掲載に向けての具体的なアドバイスをを行い、コメントした。
3. 『教育実践研究紀要』 8号 (2015) スーパーバイザー	2016年3月	住本純「小学校教員免許取得に係る科目「体育科教育法」における学生の課題に関する一考察」(第3類)について、原稿を読み、掲載に向けての具体的なアドバイスをを行いコメントした。
4. 『教育実践研究紀要』 9号 (2016) スーパーバイザー	2016年12月	林富久子「実習の実態と立案指導」(第5類)について、原稿を読み、掲載に向けての具体的なアドバイスをを行いコメントした。
5. 『教育実践研究紀要』 10号 (2016) スーパーバイザー	2017年3月	ドーマン多田さおり「幼児教育に関わる学生のための英語の語彙指導法教育実践報告」(第5類)について、原稿を読み、掲載に向けての具体的なアドバイスをを行いコメントした。
6. 『教育実践研究紀要』 10号 (2016) スーパーバイザー	2017年3月	丹羽正之「漢字の部品カードを使った学習用ゲーム」(第4類)について、原稿を読み、コメントした。
7. 『教育実践研究紀要』 11号 (2017) スーパーバイザー	2018年1月	平田 庸子・園田 雪恵「咀嚼をテーマにした食育活動に関する授業報告 -食事場面における子どもへの援助方法の検討-」(第5類)について、原稿を読み、掲載に向けての具体的なアドバイスをを行いコメントした。
職務上の実績に関する事項	年 月 日	概 要
1 資格 中学校教諭一級普通免許 (国語) 高等学校教諭二級普通免許 (国語) 司書教諭 高等学校教諭一級普通免許 (国語) 文学修士 博士 (文学)	1978年3月 1978年3月 1978年3月 1981年3月 1981年3月 2002年3月	第4564号、大阪府 第5405号、大阪府 第95387号、文部省 第344号、大阪府 第14号、大阪女子大学 第24号、関西大学
2 特許等 なし		
3 その他		

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書・単著) 1. 『源実朝』	単著	2012年6月	笠間書院 四六判 総頁数：122頁	「源実朝」の和歌47首について、口語訳、語釈を付し、鑑賞した。悲劇の将軍として伝えられる実朝の内面を表現する和歌は、同時代の歌人たちと同様に、和歌の伝統を学ぶところから始まった。歌壇の制約を受けない実朝は先行和歌を学び、その言葉と心を自由自在に引くことで独自の境地を切り開いたといえる。各歌の鑑賞の中で、言葉を組み立て、心を伝える実朝の姿を明らかにした。
(著書・共著) 1. 『八雲御抄の研究—枝葉部・言語部—研究編 本文編 索引編』  2. 『八雲御抄の研究—正義部・作法部—本文篇 研究篇 索引篇』	共著	1992年2月	和泉書院 B 5 版 総頁数： 本文編索引編282頁 研究編632頁	順徳院の著した歌学書『八雲御抄』巻三、四の本文研究と掲出された歌語について、各語の初出、用例、先行歌学書の記載などについて調査、研究をしたもの。諸本三本を翻刻した本文編と研究編・索引編となる。巻三枝葉部は歌語の集大成であり、第四言語部は世俗言・由緒言・了簡言(古歌)からなる和歌表現の集成であるところから、中世歌学の基盤として参照された順徳院の和歌知識が明らかになった。 担当部分：巻第三枝葉部、地儀部「土」～「田」草部「菫菜」～「百合」木部「橘」～「支子」鳥部「鶉」～「貌鳥」獸部「鹿」～「猪」神部「神」～「仏」巻第四言語部、由緒言71～86、了簡言41～53の本文と研究を執筆。 本文編p. 48-50 p. 66-70 p. 86-92 p. 105-109 p. 172-177 p. 202-207 p. 228-233 研究編p. 127-135 p. 198-206 p. 252-270 p. 308-322 p. 537-557 p. 609-629 片桐洋一編、青木賜鶴子・生澤喜美恵・泉紀子・金井まゆみ・木藤智子・阪口和子・清水婦久子・田中まき・中周子・野沢千佳子・東野泰子・三木麻子・山崎節子
	共著	2001年10月	和泉書院 B 5 版 総頁数：552頁	順徳院の著した歌学書『八雲御抄』巻一、二の翻刻と研究。諸伝本のなかから重要な四本を選び、それを対照翻刻した本文の研究とともに、巻二については独自本文をもつ内閣文庫本と他本の関係も考察した。巻一正義部は和歌の、六義・序文・歌体・形態・病、歌会、歌合の難、学書について、巻二作法部は歌合、歌会の作法について述べるので、先行歌学書にある前例と順徳院独自の見解部分を解明しつつ『八雲御抄』の立場と意義を考察した。 担当部分：巻第一正義部「八病」「四病」、巻第二作法部「出題」「判者」の翻刻と研究を執筆。編集担当。 p. 41-46 p. 92-96 p. 133-135 p. 203-215 p. 331-347 p. 431-434 p. 474-477 片桐洋一編、青木賜鶴子・泉紀子・内田美由紀・金井まゆみ・木藤智子・阪口和子・田中まき・鳥井千佳子・中周子・東野泰子・三木麻子・山崎節子・吉田薫

3. 『小野宮殿実頼集・九条殿師輔集殿全釈』（私家集全釈叢書31）	共著	2002年12月	風間書房 A 5 版 総頁数：372頁	<p>平安時代の私家集のうち、平安時代中期の最高権力者であった藤原実頼・師輔兄弟のそれぞれの歌集を、従来知られていなかった冷泉家時雨亭文庫本（小野宮殿集）・出光美術館本（九条殿集）により翻刻、注釈したもの。それぞれの和歌に、異同・通釈・語釈・他出・考説をつけ、解説・配列一覧・人物解説・関係年表・参考文献・人名索引・和歌索引を付した。</p> <p>担当部分和歌番号：小野宮殿集14・15・29・30・31・44・45・46・63・64・78・79・94・95、九条殿集18-20・33-35・52・53・72・73・補3・補4、「諸本配列一覧表」「九条殿集参考文献」・編集担当。</p> <p>p. 70-73 p. 87-91 p. 103-106 p. 122-123 p. 140-144 p. 162-167 p. 208-212 p. 229-234 p. 252-255 p. 277-280 p. 300-303 p. 321-328 p. 348-350</p> <p>片桐洋一、関西私家集研究会（泉紀子・磯山直子・小倉嘉夫・岸本理恵・金石哲・高木輝代・中葉芳子・早川やよい・</p>
4. 『八雲御抄 伝伏見院筆本』	共著	2005年3月	和泉書院 B 5 版 総頁数：215頁	<p>『八雲御抄』の伝本中、最も古い書写本である伝伏見院筆本を底本の形態のまま翻刻し、他の主要伝本（国会本他3本）との略校異と解説、和歌索引を付したものの。『八雲御抄』の伝本は2系統に分けられるが、精撰本系の形態を持ちつつ、本文は稿本系の内閣文庫本に近いという、伝伏見院本の貴重な本文を示すことができた。</p> <p>担当部分：翻刻分は共同研究につき本人分抽出不能。解説（p. 208-212）、編集担当</p> <p>片桐洋一監修・八雲御抄研究会編（青木賜鶴子・泉紀子・金井まゆみ・木藤智子・阪口和子・田中まき・鳥井千佳子・</p>
5. 『元良親王集全注釈』（和歌文学注釈叢書1）	共著	2006年5月	新典社 A5版 総頁数：302頁	<p>平安時代の私家集のうち陽成院第一皇子元良親王の歌集を書陵部本により翻刻し、各歌の校異・整定本文・現代語訳・語釈・他出・補説をもって注釈としたもの。解説・人名索引・和歌各句索引を付す。</p> <p>担当部分和歌番号：3・4・22-26・33・34・55・56・85・86・110・111・135-137・168・169、編集担当。</p> <p>P. 14-17 p. 42-47 p. 55-59 p. 84-87 p. 124-126 p. 157-159 p. 192-196 p. 236-239</p> <p>片桐洋一、関西私家集研究会（泉紀子・磯山直子・恵阪友紀子・小倉嘉夫・岸本理恵・金石哲・高木輝代・中葉芳子・福留瑞美・藤川晶子・三木麻子）著</p>
6. 冷泉家時雨亭叢書第84巻『古筆切 拾遺（二）』  「歌枕名寄 未勘国上」 解題（単著）	共著	2009年 2月	朝日新聞社 A 5 版 解題総頁数：横版41・縦版78頁 影印総頁数：横版202・縦版560頁	<p>冷泉家時雨亭文庫の影印（横版）に付される解題のうち、「歌枕名寄 未勘国上」を担当。零本ではあるが、「歌枕名寄」の成立に極めて近い時期の写本の価値について解題を行った。pp. 37-41</p> <p>田中登・三村輝晃・赤瀬信吾・片桐洋一・小林一彦・稲田利徳・橋本正俊・藤本孝一・三木麻子</p>

7. 『海人手子良集 本院侍従集 義孝集 新注』新注和歌文学叢 書4	共著	2010年1月	青簡舎 A5版 総頁数：403頁	北家藤原氏の貴顕たち、その百首歌（師氏）と物語的家集（兼通）、夭逝した貴公子の家集（義孝）を冷泉家時雨亭文庫を底本として読み解いたもの。それぞれの和歌に、校異・整定本文・現代語訳・他出・語釈・補説をつけ、解説・参考文献・関係系図・和歌各句索引を付した。『海人手子良集』解説他、5-7 14-17 24-26 33-35 44-46 53-55 61-63 67-71 78-80 88-91 本院侍従集4 5 13-16 28-34 義孝集4 5 12- 14 26-31 41-44 52 53 60-62 70-74番歌担当。 p. V-IX p. 9-13 p. 21-26 p. 33-36 p. 44-49 p. 61-64 p. 72-75 p. 82-84 p. 88-93 p. 102-105 p. 115-92 p. 131-133 p. 143-148 p. 161-172189-193 p. 204-210 p. 223-235 p. 249-259 p. 270-273 p. 285-291 p. 301-306 p. 325-342 p. 377-379
8. 『八雲御抄の研究 —名所部・用意部—』	共著	2013年2月	和泉書院 B5版 総頁数：567頁	順徳院著『『八雲御抄』の、歌学書の重要な要素である「地名」を集大成して用例を示す「巻第五 名所部」と、「和歌とはなにか」「和歌をいかに詠むべきか」を追求し、時代の和歌的様相を知らしめる「巻第六 用意部」について、先行の和歌、歌学、歌論を博搜して読解し、主要四伝本の翻刻と索引を付した。片桐洋一・吉田薫・阪口和子・泉紀子・三木麻子・田中まき・中周子・青木賜鶴子・金井まゆみ・鳥井千佳子・木藤智子・東野泰子との共著。 担当頁：p.iii-iv p. 3-5 p. 17-22 p. 70-75 p. 131-137 p. 179-182 p. 207-222 p. 321-335 p. 431-432 p. 448-461 p. 526-567 各翻刻と研究篇の執筆の他、全体の編集、目次・凡例・巻六解題・索引篇を担当した。
9. 冷泉家時雨亭叢書第 86巻『後撰和歌集 蒔 絵小箱三代集本』	共著	2017年4月	朝日新聞社 A5版 解題総頁数：42頁 影印総頁数：468頁	冷泉家時雨亭文庫の影印に付される解題を担当。蒔絵小箱本三代集のうち、「後撰和歌集」の写本の価値について解題を行った。竹下豊・三木麻子（共同執筆のため、担当箇所抽出不能）
(論文・単著) 1. 「実朝詠歌、一つの方法—結句を中心として—」	単著	1979年3月	大阪女子大学国文学科紀要『女子大文学 国文篇』第30号 p. 17-30	源実朝の和歌には同一の語句や結句を多用する特徴があることを指摘した。そして、そこには『古今集』・『新古今集』・『万葉集』などからの影響により、実朝が独自の感覚で関心を持つ「ことば」や歌調が存在したことがわかる。そして、そこから生み出された実朝歌の独自性、先駆性を明らかにした。いわゆる万葉調歌人ではなく、万葉歌語の使用や詠歌の内実に独自なものを内包しつつ、新古今歌人として位置した実朝を考『万葉集』の歌句を多く自歌に詠み込んだ実朝は、万葉歌を本歌取りする際にも、実は新古今時代歌人としての歌語意識によって作歌していることを踏まえ、実朝歌のうち、本文異同が多く、訓読も多様な万葉歌を本歌としたものの解釈方法を示した。「おほあらきの浮田の杜にひく標」は万葉歌句を取りながらも、新古今歌人の詠により「久しい」ものとして実朝に理解され、詠まれているのである。
2. 「実朝歌の解釈について—『おほあらきの浮田の杜にひく標』の場合—」	単著	1981年7月	大阪女子大学大学院国語学国文学専攻院生の会『百舌鳥国文』第1号 p. 14-16	

3. 「実朝詠歌、方法と内実—歌枕表現を中心として—」	単著	1982年3月	大阪女子大学国文学科紀要『女子大文学 国文篇』第33号 p. 43-74	万葉調歌人と称された源実朝と万葉歌の関係を歌枕表現を手がかりとして探り、実朝の本歌取りの方法と、その作歌方法によって詠出された、実朝の内実を考察した。実朝は、万葉集歌によって、地名と景物を結びつけ、それを前提としながら、新古今集歌を中心とした八代集の表現をもとに、イメージをふくらませている。それによって、『万葉集』の地名の表現性を王朝和歌風に拡大し、『万葉集』の地名を歌枕としているのである。
4. 「夏の露—中世和歌への一動向—」	単著	1985年10月	大阪女子大学大学院国語学国文学専攻院生の会『百舌鳥国文』第5号 p. 40-53	『万葉集』から和歌の素材として詠まれてきた「露」は、本来、秋の景物であるが、『新古今集』では四季にわたって詠まれるようになる。その理由をそれぞれの季節の露歌を検討することで考察し、「露」の表現も、微細な自然描写と歌材の拡張が求められた中世和歌への志向の中にある事を示した。「夏の露」は、新古今集で新たに展開された夕立や納涼の歌の素材の一つとして、一首の中心的景物となったのである。
5. 「『八雲御抄』と順徳院詠—歌学と実作の間—」	単著	1991年3月	『日本文芸思潮論』 桜楓社 A 5 版 総頁数：1228頁	片野達郎氏の東北大学退官を記念し、その講筵に列した者に加えて、全国の研究者に執筆依頼して編まれた論文集で、日本文芸の各論を各時代にわたって論述した本書に、「『八雲御抄』と順徳院詠—歌学と実作の間—」と題する論を収めた。 鎌倉期、新古今集編纂後の歌壇の中心となった第84代順徳天皇は、初学の頃から王朝和歌に関する諸説や知識を集大成した歌学書『八雲御抄』執筆に取りかかった。天皇が歌学的知識をいかに自作詠に反映したのかという問題を、順徳天皇の詠歌と『八雲御抄』名所部の記述を検討し、考察した。『八雲御抄』は先行書としての『五代集歌枕』を利用しつつ、以後の歌集や散文資料からも用例を博搜するが、詠歌には歌学知識から離れて新しい創造を試みた過程が看取できた。 p. 523-543 片野達郎編、阿部正路・原田貞義・佐々木民夫・佐藤武義・佐藤稔・山上義実・平林文雄・新田孝子・菊池仁・久保木哲夫・荒暁子・家井美千子・鬼塚厚子・新藤協三・臼田昭吾・錦仁・赤羽淑・鬼塚隆昭・菊池靖彦・紙宏行・久保田淳・片山享・寺島恒世・田尻嘉信・藤田百合子・三木麻子・細谷直樹・志村士郎・井上宗雄・伊藤敬・有吉保・田中初恵・福田秀一・佐佐木忠慧・金沢規雄・生田勝彦・赤羽学・安井久善・三浦邦夫・村上雅孝・玉蟲敏子・酒井哲朗・庄司淳一・麻生和子・木村由花・加藤二郎・蒲生芳郎・渡辺善雄・佐藤信宏・久保忠夫・北

6. 「実朝歌考一定家本における海・雨・故郷題の歌一」	単著	1991年10月	『王朝の文学とその系譜』 和泉書院 A5版 総頁数：620頁	片桐洋一氏の還暦を記念して編まれた平安文学研究者による論文集に、「実朝歌考一定家本における海・雨・故郷題の歌一」を執筆した。 鎌倉幕府第三代将軍・源実朝の家集『金槐集』の伝本のうち、藤原定家所伝本は実朝自撰の可能性が高いとされる。そこで、定家本『金槐集』の詞書から実朝歌の特徴を考察し、故郷・雨・海題が集の特徴を示すことを指摘した。海題は名所歌枕を愛好したこと、雨題は新古今的な繊細な表現を好んだこと、故郷題により「古り荒れた」イメージの和歌群を点在させたことを示し、編纂方法からも作者自撰の可能性が高いことを考察した。 p. 255-273 片桐洋一編、神谷かをる・片桐洋一・里依久子・木藤智子・泉紀子・田中まき・中周子・阪口和子・野沢千佳子・竹下豊・吉田薫・東野泰子・生澤喜美恵・三木麻子・乾安代・廣田哲通・内田美由紀・青木賜鶴子・上丸恵都子・竹村浩子・清水婦久子・堀口康生・進士恭子・
7. 「大和物語を読む」	単著	1992年11月	世界思想社 四六版 総頁数：302頁	「王朝物語の世界」・「王朝物語を読む」・「王朝物語の享受」・「王朝物語への手引き」からなる、王朝物語（平安時代の物語）の誕生、享受、発展の姿を解説した論文集。「王朝物語年表」・「索引」を付す。 「大和物語を読む」と題し、『大和物語』が重視する宇多帝を考察した。公的な立場の帝は人々の感情から遠く離れた大きな存在として描かれ、一方で個人としての宇多は、「憂き世のあはれ」を強く感じさせる。『大和物語』では公私両面において帝の特性が語られ、虚構化されたことを明らかにした。宇多帝は、王朝生活の優雅さ、華やかさが語られる一方で、個人の持つ哀れさを訴える『大和物語』の主題を具現しているのである。 p. 93-114 片桐洋一・増田繁夫・森一郎編、片桐洋一・増田繁夫・森一郎・三木麻子・阪口和子・三木雅博・神尾暢子・鈴木紀子・片岡利博・河田昌之・竹下豊著
8. 『歌枕を学ぶ人のために』 「中世和歌の展開と歌枕―建保三年内裏名所百首題の地名を中心として―」	単著	1994年3月	片桐洋一他編『王朝物語を学ぶ人のために』 世界思想社 四六版 総頁数：300頁	和歌に詠まれる名所歌枕の諸相を『万葉集』から中世にかけて、和歌表現と風土地理の両面から探った論文集。「歌枕論序説」「歌枕表現の史的展開」「歌枕各論」「歌枕データバック」からなる各章のうち、「史的展開」を考察する論として第二章に「中世和歌の展開と歌枕―建保三年内裏名所百首題の地名を中心として―」を執筆した。
9. 「歌語「野分」の考察―『源氏物語』との接点―」	単著	1998年2月	帝塚山学院大学日本文学科『日本文学研究』第29号 p. 1-14	「風」を詠む和歌表現の諸相を取り上げ、その中で特に「のわき」という歌語の成り立ちと、『源氏物語』野分巻が、歌語「野分」に与えた影響を考察した。藤原定家を中心とした新古今歌人たちの深い『源氏物語』理解と、京極派歌人の自然描写を中心とした詠風との違いを明らかにした。

10. 「『顕注密勘』と定家の和歌表現」	tantyo	2001年12月	『王朝文学の本質と変容 韻文篇』  「『顕注密勘』と定家の和歌表現」和泉書院 A5版 総頁数：826頁	片桐洋一氏の古稀を記念して編まれた論文集。物語研究者を中心に編まれた「散文編」と一対を為す、和歌研究者を中心に編まれた本書に、「『顕注密勘』と定家の和歌表現」を執筆した。 六条家の顕昭が『古今集』に解釈を施し、さらに藤原定家が注釈を付記した『顕注密勘』と呼ばれる注釈書を取り上げ、六条家と定家の注釈態度を比較考察し、注釈が定家の実作に及ぼす影響を考えた。定家の注釈に用いられた古今集本文や解釈が顕昭（六条家）と異なる場合、定家が『密勘』にどのように記していくのか、また定家の『古今集』の解釈が実作と如何に関わっているかを検討し、『密勘』に記された古今集和歌の解釈が、定家詠の解釈にも有益であることを明らかにした。 p. 615-636 片桐洋一編、片桐洋一・徳原茂美・三木雅博・泉紀子・神谷かをる・岩井宏子・田中登・後藤昭雄・丹羽博之・木藤智子・阪口和子・田中幹子・中川順子・北山円正・田島智子・山本淳子・藤川晶子・岸本理江・中周子・竹下豊・鳥井千佳子・鈴木紀男・東野泰子・芦田耕一・吉田薫・寺島修一・蔵中さやか・金石哲・安井重雄・赤瀬信吾・近藤美奈子・
11. 「『八雲御抄』と順徳院の和歌活動」	単著	2002年1月	関西大学国文学会『国文学』第83・84合併号 p. 204-218	『八雲御抄』の歌論のなかで順徳院自身の見解とみられる部分を検討し、それが、順徳院の実際の歌壇活動のなかで体験し、得ることのできた教えによって形成されたことを実証した。それは巻六の歌論部分にも見いだせる現象で、順徳院は定家の教えを受ける中で、現在の歌壇状況に危機感を持ち、その歌壇を自らが支え展開してゆく覚悟を歌論として記していったと思われる。
12. 「『元良親王集』の表現―「入りにし月」をめぐる―」	単著	2005年3月	大阪女子大学大学院国語学国文学専攻院生の会『百舌鳥国文』第16号 p. 47-55	『元良親王集』の解釈を通じて、同集が贈答相手の女性ごとに和歌をまとめ、女性の和歌だけでも単独で載せることもあることを明らかにした。それは同集が「歌語り」というべきエピソードを重んじて、一話を語るように編集されたため、人の名、地名などに着目して和歌を語るという要素を多く持っている、平安初期の物語的歌集の典型であることを考察した。
13. 「『八雲御抄』と『源氏物語』」	共著	2008年9月	森一郎・岩佐美代子・坂本共展編『源氏物語の展望』第四輯三弥井書店 A5版 総頁数：334頁 pp. 304-332.	『源氏物語』千年紀に際して企画された『源氏物語』最新の研究成果の論集。平成19年から年2冊刊行中の全集のうち、第4輯に「『八雲御抄』と『源氏物語』」と題する論文を寄せた。『八雲御抄』は『源氏物語』をどのように引いたのか。和歌の素養としての『源氏物語』から、難解な言葉を解説し、歌語の用例を博搜した実態を検討し、順徳院の『源氏物語』に対する意識を探った。当時の『源氏物語』本文の問題も含め、中世の源氏物語享受を明らかにするための基礎的研究として執筆した。 岩佐美代子・武原弘・田坂憲二・神谷かをる・藤本勝義・所京子・磯水絵・上野辰義・中嶋朋恵・原田敦子・三木麻子の



14. 「海人手古良集について」	単著	2009年3月	『夙川学院短期大学研究紀要』第38号 P86-69	摩訶般若の系譜(海人手古良集)は口伝の体裁を取る。百首歌の系譜の中で、また師氏が政治的に不遇に終わったと見て、人生を嘆いてこの家集が編まれたと考えられている。しかし、一首一首を読み説いた注釈を通じて、師氏が知的な制作意図を持って、百首歌による表現を試みたことを明らかにした。構成は勅撰集に倣い、「好忠百首」からも影響を受けている。また集名も物語的私集とは一線を画する創作を印象づけるために名づけられたのである。
15. 「順徳院と『源氏物語』」	単著	2011年4月	森一郎・岩佐美代子・坂本共展編 『源氏物語の展望』第九輯 三弥井書店 A5版 総頁数：340頁 pp. 317-337	順徳院の『源氏物語』愛好を明らかにした「『八雲御抄』と『源氏物語』」に続き、中世歌人としての順徳院が『源氏物語』を崇拝した実態を「順徳院御記」から読み取った。また物語のなかで描写された自然が次第に和歌表現の中にも取り入れられる例を指摘し、物語を深く読む力が『源氏物語』を和歌に先行する出典となし得ることを指摘した。順徳院の『源氏物語』取りについては、『八雲御抄』への引用ほど単純ではないが、典型例を示して考察した。清水婦久子・松岡智之・平林優子・仁平道明・上野辰義・藤本勝義・星山健・北村英子・笹川博司・三木麻子の共著。
16. 「物名を詠むこと—宇多院物名歌合・亭子院女郎花合を中心に—」	単著	2016年3月	『夙川学院短期大学研究紀要』第43号 pp. (1)-(13)	「宇多院物名歌合」「亭子院女郎花合」「宇多院女郎花合」「朱雀院女郎花合」として伝わる宇多院の和歌活動のなかで、「女郎花」など物名を詠み込む歌合に焦点を絞り、古今集以前の物名表現の考察と、「宇多院物名歌合」成立時期について検討した。
17. 「『国語』における古典教育—どのように古典に親しみ、学んでゆくか—」	単著	2017年3月	『夙川学院短期大学研究紀要』第44号 pp. (1) 114-17) 98	中学校・高等学校でも古典の授業数が減り、古典離れが指摘される中で、小学校教科書からも古典教材が取り入れられるようになった。教員・生徒の双方にある古典への苦手意識をどのように解消していくか、現状の取り組みの分析と方法の考察を行った。
(教育研究実践紀要) 1. 「大学における地域子育て支援—しゅくたん広場での実践—」	共著	2011年3月	『夙川学院短期大学教育実践研究紀要』第3号 (2010) pp. 17-24のうち、pp. 20-22	番匠明美・井上千晶との共著。子育て支援広場の学内立ち上げに関わり運営が軌道に乗るまでの1年半の経報告とともに、学生に及ぼす教育効果について考察した(第6類)。三木担当は、(2) 大学施設の開放【1】図書館【2】学生食堂・実習調理食堂の利用について、現状報告と問題点の指摘を行った。(第6類)
2. 「入学前学習の取組～国語課題を中心として～」	共著	2015年3月	『神戸夙川学院大学・夙川学院短期大学教育実践研究紀要』【2013-2014年合併号】 pp. 37-49のうち、pp. 39-48	番匠明美との共著。本学が行っている入学前学習について、教務委員の立場からその概要を番匠が執筆し、「国語」の取り組みについて三木が執筆した。(第6類)
3. 「『国語科教育法』における取り組みと課題」	単著	2017年3月	『夙川学院短期大学教育実践研究紀要』第10号【2016】 pp. 21-28	筆者の担当する「国語科教育法」の講義の中で、学生が行う模擬授業について、報告した。国語科教育法を受講する学生の意識の変化とその課題や工夫点などを具体的に取り上げ、改善点についても言及した。(第3類)
4. 「教科『国語』における学びと指導」	単著	2018年3月	『夙川学院短期大学教育実践研究紀要』第12号【2017】 pp. 50-60	筆者の担当する、教科「国語」の講義の中で、新学習指導要領に対応していけるような学生の技倆と意識作りと、その具体的な方法の指導を報告した。(第3類)

5. 「小学校・国語教科書「ことば」教材の研究——第1学年・第2学年を中心として——」	単著	2018年3月	『夙川学院短期大学 教育実践研究紀要』第12号 【2017】 pp61-73	小学校2年の教科書を用いた国語科教科教育法の講義の中で、言葉教材にしぼって行われた模擬授業に受講生がどのように取り組んだかを報告した。また、その前提として、各教科書が学習指導要領に沿って、どのように言葉教材を展開しているか、その内容の検討を踏まえ、ことば教材のあり方を考察した。(第3類)
6. 「保育者養成と絵本研究の方法」	単著	2019年3月	『夙川学院短期大学 教育実践研究紀要』第13号 【2018】 pp. 44-49	保育者養成校として講義の中で「絵本」を取り上げる機会が多いが、学生が子どもたちのために絵本を選ぶ時に、必要な知識や方法は何かを探るために現状の分析と必要な講義内容について、考察した。(第3類)

その他(解説・解題・翻刻・辞典など)

(解説書)				
1. 『研究資料日本古典文学 ① 漢詩・漢文・評論』	共著	1984年3月	明治書院 A 5 版 総頁数：337頁	教育の現場に立つ人々の教材研究資料のために、古典文学鑑賞・研究に必要な知識として諸文献の成立や概観、意義などを解説した叢書の1冊である。 評論のうち藤原定家の歌論である「近代秀歌」「詠歌大概」「毎月抄」を担当した。 p. 173-180 久保田淳・大曾根章介・本間洋一・渡辺秀夫・三木麻子他多数著
2. 『平安文学研究ハンドブック』	共著	2004年5月	和泉書院 A 5 版 総頁数：248頁	平安文学研究に関する研究史のガイドブック。A和歌・漢詩文、B日記・随筆、C物語、D説話集・歴史物語、E総論、年表からなり、各ジャンルの戦後から最新の研究までを論じる。各項目は研究史・伝記・本文・作者・今後の課題などに分けられ詳細に研究史を辿る。 項目「八雲御抄」「源実朝」を担当。 P. 127-p. 130 田中登・山本登朗編 田中登・山本登朗・三木麻子など79名の著

(書籍解題)

3. 「片桐洋一教授所蔵 古今伝授書解題」  「17. 古今之秘伝」 「18. 光廣伝古今三鳥三木記」2項目	共著	2002年1月	関西大学国文学会誌 『国文学』第83・84合併号 p. 233-265	片桐洋一氏所蔵の江戸時代の古今伝授書を分担し、翻刻、検討した後、解題を執筆したもの。 「17. 古今之秘伝」と「18. 光廣伝古今三鳥三木記」を担当執筆した。17は三鳥・三木一草・二聖・六歌仙・塩尻・竹の都・もこう・東鑑三箇伝・鳥居大事・神の内容で『古今伝授』に伊勢物語や大和物語など他の伝授資料を併せ成立したものの。18は三鳥切紙伝から六歌仙伝までは17『古今之秘伝』と同じで草木異名と古今集三鳥記録があり、「鳥丸光廣」の名が見えるのが独自で、和歌会の次第など歌学知識もを併せている。 p. 251-254 藤川晶子・中葉芳子・高木輝代・泉紀子・岸本理恵・三木麻子・磯山直子・金石哲・早川やよい・長谷川友紀子・福留瑞美・日坂五月・田中まき・木藤智子著
---	----	---------	---	---

(解題・翻刻)

<p>4. 『CD-ROM版 新編 私家集大成』 解題 2・翻刻1</p> <p>73師輔 解題(新編補遺)、91・92実頼 解題(新編補遺)、92 「小野宮殿集」翻刻：(単)</p>	<p>共著</p>	<p>2008年12月 2013年5月 ウェブ版公開</p>	<p>『私家集大成』CD 化委員会編 エムワイ企画</p>	<p>書籍版『私家集大成』出版後、冷泉家時雨亭文庫の公開などにより新たに見出された私家集の資料を踏まえ、解題の補遺と新資料の翻刻・解題が行われた。そのうち、師輔・実頼を担当。解題では近年、文化庁に納められた師輔集の定家本の存在や、清慎公集(実頼)の新出春日切・新しい系統の一本となる「小野宮殿集」について述べ、冷泉家時雨亭文庫蔵「小野宮殿集」の翻刻を行った。CD-ROM版のため頁数などの表示は不可能。</p>
<p>(辞典項目執筆)</p>				
<p>5. 『歌ことば歌枕大辞典』11項目</p>	<p>単著</p>	<p>1999年5月</p>	<p>角川書店 A4版 総頁数：1031頁</p>	<p>歌ことば、歌枕、歌題について、用語、用法の解説と、和歌の鑑賞を施した、和歌研究者、実作者のための辞典。項目「薄花桜」「咲く」「桜麻」「桜色」「桜狩」「残花」「住み憂し」「住吉」「花桜」「八重桜」「山桜」を担当。担当部分：p.141 p.370-371 p.372-373p.393 p.463-464 p.466-467 p.707 p.910-911 p.914 久保田淳・馬場あき子編、三木麻子など全189名による執筆。</p>
<p>6. 『和歌文学辞典』12項目 「宇多院歌合」「本院左大臣家歌合」「定文家歌合(延喜五年)」「式部卿宮前裁合」「元良親王」「敦実親王」「敦慶親王」「師輔」「師氏」「元良親王集」「海人手古良集」「師輔集」</p>	<p>単著</p>	<p>2013年4月</p>	<p>『日本文学ウェブ図書館』公開 古典ライブラリー</p>	<p>明治書院から出された『和歌文学辞典』から大きく研究が進んだため、新しい研究成果をとり入れることを目的に企画された和歌辞典。インターネット環境の進んだ現在に利用が高まるよう、ウェブ公開されているが、さらにCD-ROM版での公開、書籍版の販売も予定されている。「宇多院歌合」「本院左大臣家歌合」「定文家歌合(延喜五年)」「式部卿宮前裁合」「元良親王」「敦実親王」「敦慶親王」「師輔」「師氏」「元良親王集」「海人手古良集」「師輔集」について解説した。ウェブ版のため、頁数などの記述は不可能。</p>
<p>(美術館展示)</p>				
<p>7. ネットミュージアム 兵庫文学館</p>	<p>共著</p>	<p>2002年11月 12日開館</p>	<p>兵庫県教育委員会</p>	<p>企画展示(歌枕館「須磨・明石」)執筆 常設展示(古典文学) 協力(データ蒐集・提示)</p>
<p>(その他、転載)</p>				
<p>国文学年次別論文集 中古1 平成10 (1998)年</p>	<p>共著</p>	<p>2000年3月</p>	<p>朋文出版 B5横版 全頁数：782頁</p>	<p>学術文献刊行会編 紀要・学会誌に掲載された、国文学に関する論文・資料を一年毎に収集したもの。時代別、六分野にわけ分冊とし、収録しない論文・資料、単行本を文献目録として付している。「歌語「野分」の考察—『源氏物語』との接点—」を収録。P.135-142</p>
<p>国文学年次別論文集 中古1 平成17 (2005)年</p>	<p>共著</p>	<p>2007年9月</p>	<p>朋文出版 B5横版 全頁数：698頁</p>	<p>学術文献刊行会編 紀要・学会誌に掲載された、国文学に関する論文・資料を一年毎に収集したもの。時代別、六分野にわけ分冊とし、収録しない論文・資料、単行本を文献目録として付している。「『元良親王集』の表現—「入りにし月」をめぐって—」を収録。P.465-469</p>
<p>(学会発表)</p>				

1. 「実朝詠歌、一つの方法—結句を中心として—」	単独	1978年11月	和歌文学会関西例会第8回（大阪市立大学）	源実朝の和歌の特徴として同一歌語、同一結句の多用があることを指摘した。また、それは先行和歌の本歌取りという、同時代の歌人達と同様の方法を採用しつつ、結果として実朝独自の詠法に辿りついた結果であることを発表した。
2. 「実朝の方法—万葉歌枕を中心として—」	単独	1980年10月	和歌文学会第26回全国大会（中央大学）	源実朝の和歌における歌枕使用について、『万葉集』の地名歌の影響の考察を発表した。
3. 「新古今集の表現—歌材『露』に関して—」	単独	1986年4月	和歌文学会関西例会第30回（甲南大学）	「露」の表現史を考察し、新古今時代には、四季部の各季節ごとに露歌が置かれるようになった背景を考察し発表した。
4. 「定家本『金槐和歌集』の配列について」	単独	1992年4月	和歌文学会関西例会第48回（帝塚山学院短期大学）	定家本『金槐和歌集』が実朝の自撰である可能性を配列から考察し、『新古今集』を意識した編集と後鳥羽院への配慮が感じられることを発表した。
5. 「『八雲御抄』と順徳院の和歌活動」	単独	2001年10月	和歌文学会 第47回全国大会（関西大学）	『八雲御抄』は先行歌学書を継承する形で記されているが、順徳院独自の見解や定家・家隆などの発言で、書物にはみいだせない論も記されている。それらの見解は、順徳院主催の歌合における判や実作が、順徳院の歌論として結実し、『八雲御抄』に著されたことを発表した。
6. 「源実朝とその周辺」	単独	2013年12月7日	和歌文学会第113回関西例会（於大阪府立大学）	周到な計算のもと、虚実入り交じった世界を描き出していること、またその手法によって実朝とその周辺が和歌にいそしんだ場面を家集に残そうとしたことを実例をあげて示した。
(修士論文)				
「実朝詠歌、方法と内実—歌枕表現を中心として—」	単独	1981年3月	大阪女子大学	源実朝の歌枕表現について、主に『万葉集』に出典を持つ地名がどのように実朝によって「歌枕」となるのか、その結果詠み出された実朝の心象についても考察した。
(博士論文)				
「王朝和歌の継承と展開」	単独	2002年3月	関西大学	定家・実朝・順徳院の和歌活動についてまとめた。
(科学研究費補助金)				
1. 『八雲御抄の研究—名所部・用意部—』	単	2012年11月	日本学術振興会	共著書8について科研費申請を行い、「平成24年度科学研究費助成事業 科学研究費補助金（研究成果公開促進費）」を獲得した。
2. 「平安初期歌合の研究」	研究代表者	2015-2019年 基盤研究 (C)課題番号15K0223	日本学術振興会	『古今和歌集』の表現を確立する土台を作った宇多院歌壇の活動を、歌合に着目して明らかにする。

## 活動（学内管理・運営、地域・社会）の記録

2019年 6月 24日

氏名 三木 麻子 (印)

学内管理・運営活動	期 間	概 要
1. しゅくたん広場の立ち上げ	2009年～2010年度	西宮市地域子育て支援の活動の一環として本学でも子育て支援広場を開始することとなった。立ち上げのための視察、西宮市への申請、報告書の作成、学内施設（図書館・食堂）利用への折衝など事業が軌道に乗るまでの事務的手続きを行った。  学生が参加するオーストラリアでの保育実習に関し、実施方法を名古屋短期大学・名古屋文化専門学校に倣いつつ、2017年に共同開催した。その企画運営に携わり、2018年度からは本学単独での開催としたため、企画・学生の指導など・オープンキャンパスへでの広報など事前事後を含めた運営を行った。2017年・2018年は引率を行い、実習に向かう学生を指導した。
2. 図書館館長	2013年9月～2019年3月	
3. 学科長	2016年4月～2018年9月18日	
4. オーストラリア保育実習研修旅	2017年～2019年	
5. 学長	2018年9月19日～	
地域・社会活動	期 間	概 要
1. 和泉市文学講座	1990年10月18日	歌集』の編集方針や自然描写について講演した。
2. 和泉市文学講座	1991年10月1日	『八世物語』を詠む』と題し、『八世物語』の帝の公的な側面・私的な側面を考察し、講演した。
3. 門真市市民講座	1991年10月4日	『新古今和歌集』について、講演した。
4. 和泉市文学講座	1992年10月11日・18日	①「『新古今和歌集』と『源氏物語』」と題し、『源氏物語』の世界を和歌に詠む定家たちの作歌方法について講演した。  ②「『新古今和歌集』と『源氏物語』」と題し、『源氏物語』の世界を和歌に詠む定家たちの作歌方法について講演した。
5. 高石市市民講座	1993年 8月 5日・12日	①「『百人一首』と藤原定家」を題し、藤原定家が『百人一首』を編集するまでの経緯を講義した。  ②「『百人一首』を読む—76番歌から100番歌、近現代和歌史として—」と題し、定家が、定家にとっての「近代」をどう捉えていたかを和歌の解釈とともに講演した。
6. 阪南市市民講座	1996年 6月20日・7月4日・同18日・8月1日	『百人一首』について成立、内容を4回にわたり講演した。
7. 和泉市文学講座	1997年10月15日	「『源氏物語』を読む（野分）—『源氏物語』と和歌—」と題し、野分の巻を読みつつ、和歌に詠まれた「野分」の語の変遷を講演した。
8. 『源氏物語』講座 （阿倍野市民センター「王朝文学の世界」）	1998年 6月～2003年12月	毎月2回『源氏物語』を通読しながら、その世界観を語り、和歌の表現との関わりについて講義した。
9. 和泉市文学講座	1998年9月16日	「『更級日記』の旅」と題し、孝標の女にとっての旅を考察した。
10. 和泉市文学講座	2000年10月4日	「『源氏物語』とその後の物語」講座の第1回「『源氏物語』の世界（1） 簀木・空蟬」を担当し、『源氏物語』の構成の中での簀木・空蟬巻の位置を講演した。

11. ひょうご講座（ひょうご大学連携事業推進機構）	2007年10月20日	「続・日本の古典を楽しむ—王朝文学とその広がり—」講座の中で、「(7) 王朝物語と中世の歌人」と題し、新古今歌人の平安物語利用について講演した。
12. 日本の古典を楽しむ—王朝人の生活と文化—（ひょうご講座ひょうご大学連携事業推進機構）第3回・第9回	2008年9月27日・11月8日	<p>(3) 「女房の生活—文化サロンの一員として—」と題して、平安朝の女房が生活面だけではなく、文化面を支える重要な役割を果たすことを、女流歌人「伊勢」の活躍を例に講演した。</p> <p>(9) 「競い合う和歌—天徳四年内裏歌合を中心として—」と題して、和歌を披露する一形式である「歌合」が、和歌のみならず音楽や工芸、衣装など総合的な文化水準の競合であり、平安文化の中心に和歌があったことを講演した。</p>
13. 市民対象講座 インターカレッジ西宮 古典文学レクチャー (1) (2)	2009年11月19日・11月26日	<p>「日本人の美意識—その源を探る」(1) 「古今和歌集の四季」と題して『古今和歌集』によって日本人の基礎的な美意識の構築が行われたことについての講演を行った。</p> <p>「日本人の美意識—その源を探る」(2) 「春は曙か」と題して、伝統的な和歌によって培われた日本人の美意識を越えるところに、新しい文学の創造があったことを講演した。</p>
14. 教員免許更新講座（必修講座）	2009年8月	「伝統文化が育んだ言葉」について講義した。
15. 大通寺（京都）実朝忌講演	2010年1月27日	実朝の妻の縁の寺で毎年行われる実朝に関する講演会で「歌人・実朝への誘い—古典和歌とは—」を講義した。
16. 教員免許更新講座（選択講座）	2012年6月から8月	3回にわたり、「国語教科書の中の古典」と題する講義を6時間ずつ行った。小学校から高校教員までを対象とし、古典教育が幼時から行われるようになった現在、受験教育に組み込まれるまでの長い期間にどれだけ楽しんでその本質に迫れるか、現職教員の方々の実践を学び合いながら講義する。
17. 教員免許更新講座（選択講座）	2013年～2018年	年度毎に2回から3回にわたり、「教科書の中の古典」と題する講義を6時間ずつ行った。2012年に比べ、次第に中学高校教員の受講が増え、前年内容に加え、より専門的な講義が行えるようになった（5参照）。
18. 教員免許更新講座（選択講座）	2018年	「絵本研究」と題する講義を6時間ずつ行った。幼稚園・認定こども園教諭の参加を得た。